

三謙北方

あの時、自分が選んだのはなんだったのだからいいや、選ぶということをしたのだからか、選んだのは、正しいだけではないのか



約束

◎The Promise◎Kenzo Kitakata

成功者、と呼ばれるようになった。48歳だった。これからの人生に、大きな破綻があるとは思えない。不自由なものは、ほとんどなかった。欲しいと思っているものの、かなりの部分を実際に手に入れることができるようになった。そうすると、あまり欲しいとも思わなくなった。しかし、心の底で、なにかを強烈に欲している。2、3年前から、そうだった。それかなんなのかは、見えてこない。厄介なものを抱えた、という気分だけかいつもつきまとっている。

幻冬舎

約束



〈著者紹介〉

北方謙三 1947年、佐賀県唐津市生まれ。1973年、中央大学法学部卒。1981年、『吊鐘はるかなり』でデビュー。1983年、『眠りなき夜』で第1回冒険小説協会大賞、第4回吉川英治文学新人賞を受賞。1991年、『破軍の星』で第4回柴田練三郎賞を受賞。



約 東

1994年3月27日 第1刷発行

著 者 北方謙三

発行者 見城 徹

発 行 所 株式会社 幻冬舎

〒160 東京都新宿区三栄町18-7

電話:03(5379)8011(編集)

03(5379)8086(営業)

印刷・製本所:大日本印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示しております。

©KENZO KITAKATA 1994

Printed in Japan

ISBN4-87728-002-2 C0095

約

束

装帧／亀海昌次

第一章

1

常連の客ではなかった。

入ってきた時に店の中にくれた一瞥で、吉井にはそれがわかった。どういう店なのかと、測るような眼だったのだ。

明子のかすかに戸惑う仕草を見せ、なにか言いそうになり、それから笑顔を作るといらつしやいませ、と言った。カウンターには吉井ひとりで、音楽さえもかかつていない。男は、それを気にしたふうでもなかった。

「コニヤックを一杯」

音楽のない店の中は、月曜の朝の教会のようで、男の声は暗く湿りを帯びて聞えた。

明子は、ブランドグラスとチェイサーを置き、男の前に立った。吉井は客ではなく、男は

客だということを考えれば、当たり前行動だった。ただ、この店はいま当たり前前の状態ではない。カウンターのの中にはバーテンがいて、ブースには女の子たちがいる。嬌声と音楽が入り混じり、煙草の煙も籠っている。一週間前はそうだっただろうが、いまいるのは禁煙して多少苛立っている刑事がひとりだった。吉井の禁煙は、四日目になる。

「ボトルキープも、できるのかね？」

四十五にはなっているが、五十にはなっていない。その程度の歳恰好だろう、と吉井は思った。吉井は、四十七になる。

男は、スツールを二つ隔てたところにいて、両肘をカウンターに付けていた。いいジャケットだった。靴も悪くない。自分の身なりと較べると、ちよつと気後れがしてしまいそうだった。若い者がいい服を着ていても、それほど気になったりはしないが、同年配だと服もその人間の人生を測るもののひとつだった。

男はなにか難しい酒の名を言ったが、それはなく、カミユのナポレオンで妥協しようだった。

ネームタグに、男がボールペンで名前を書きこむ。藤森という名だった。ちよつと離れたものは、よく見える。そうだったのは、何年ほど前からだったのか。

男が、煙草に火をつけた。吉井は横をむいた。顔をどちらにむけようと煙は流れてくるが、うまそうに喫っているところを見たくなかった。

「名前は？」

「明子です」

「静かな店だね。音楽もかけないのか？」

「どういふものが、お好きですか。CDがいくらか揃えてありますけど」

「ソニーボーイ・ウィリアムソン」

「デルタブルースですわね。CDは出ていませんわ。あたしはレコードを持ってますけど、ここじゃかけられません」

しばらく会話が途絶えた。吉井は、壁にかけてある絵に眼をやっていた。なにが描かれているか、どう見てもわからない。つまり、抽象画というやつだ。

「めずらしいですね。ソニーボーイがお好きなんですか？」

「昔、好きだった」

吉井は、妙な気分に襲われた。ゆつくりと、顔を藤森の方へむけた。刑事の坎のようなものが働いた、としか言いようがなかった。藤森は、吉井を見ていた。眼が合うと、藤森はちょっとほえんだ。

「ブルースハープが好きだった、知り合いがいてね」

藤森を見つめている明子に、吉井は眼を移した。二十四歳。これからますます女らしくなっていく年齢だろう。恋人がいるという情報はなにもない。もともと、明子のことを詳しく調べたわけではなかった。

「あたしも、部屋にあるレコードは、貰ったものですわ。ジャケットを、ぼんやり眺めてたり

するのが好きで、実はあまり聴いたことはないんです」

藤森は、まだ吉井を見続けた。

執拗な視線という感じはしない。まるで、もののように見つめられている。その意味を、吉井に考えさせないような視線だった。

「この店の名、『ベッシー』だね？」

「そうです。ベッシー・スミスという歌手の名前から取ったらしいですわ」

「悪くない」

「あたし、ベッシー・スミスって知らないんです」

「ビリー・ホリデーと並ぶ歌手だった。交通事故がもとで、孤独に死んだがね」

ようやく、藤森の視線が吉井からはずれた。意味もなく、吉井はほっとした。藤森が、また煙草に火をつけた。

「リバーサイド・ホテルですわね、死んだの。アメリカ南部の、なんとかいう小さな街の」

「クラクステイル」

「よく御存知ですね」

「ブルースに詳しい知り合いが、教えてくれたのさ」

「ギターの方は？」

「あまり聴かない。勿論、弾けもしない」

明子が、声をあげて笑った。

吉井が割りこむことなど、できそうもない話題だった。ブルースというのは流行歌の曲名によくあるが、そのブルースとはいくらか違うようだった。眼の前には、酒もなければ灰皿もない。ぼんやりと、吉井は二人の会話を聞いていた。

「なんとなく、馴染めないと思うことがあります。もともとの血が違うつて。それでも、時々聴いてます。最近は、よく聴くと言つていいかもしれません」

「ほう。なにか、そういう心境になつたのかね？」

「なんとなくです」

弟を、勾留中だった。殺人容疑で、五日前からだ。はじめは、捜査本部のほとんどが確信を持っていたが、それがいくらか疑わしい状況になつてゐる。証拠は、物証や状況証拠も含めてすべて揃つてゐるのに、本人にアリバイがある可能性が出てきたのだ。なにか揃めるものはないかと、吉井はいま現場の「ベッシー」に来てゐる。

事件が起きたのは十日前で、明子がブルースを聴くようになったのが、そのためかどうかはわからない。

「ベッシー・スミスのレコードも持つてるのかね？」

「ジャケットの端が、ボロボロになつてゐるわ」

「いいね」

「この店へ来て、デルタブルースの話をした方つて、はじめて」

「若い連中がよく聴くロックつてやつも、デルタブルースの流れを汲んでいと言えなくもな

い。ほんとうは、知らない間に聴いているのかもしれないよ」

藤森はコニヤックを飲み干し、キープしたカミユの封を切った。

「君は？」

「一杯ぐらいなら、いただけます。それ以上だと、仕事ができなくなるわ」

吉井は、無意識にカウンターの指で叩いている自分に気づいた。禁煙してからの癖だ。眼の前に、コニヤックが置かれた。藤森が、笑いながら見つめている。

「こちらのお客様からです」

明子は、笑っていなかった。ちょっと戸惑い、それから吉井は黙ってグラスを押し返した。奢られる理由は、なにもない。

「煙草を喫わない方のそばで、プカプカやってる。それは申し訳ないことだと思ひましてね」

吉井は、かすかに首を振った。

それ以上、藤森も勧めようとはしなかった。すでに、十一時半を回っている。この店は、十二時閉店となっていたはずだ。

「遠いね」

「なにがですか？」

「デルタブルースの時代さ」

「ほんとのところ、いつごろの音楽なのか、あたしよく知らないんです」

吉井は腰をあげた。

明子の弟のアリバイについては、ほかの者が調べている。この店に夜半までいるのは、時間の無駄と吉井には感じられてきた。ブルースの話を、いつまで聞いていても仕方がない、という気もしてくる。

「どうも」

明子はそう言っただけだった。

外は、肌寒かった。四月のはじめには、こういう夜が時々ある。吉井は三十メートルほど歩き、『ベッシー』の入口が見通せる電柱のかげに立った。

通行人は、あまり多くない。繁華な場所からは、かなり離れていた。車は多いが、ほとんどは走り去るだけだ。

藤森が出てきたのは、十二時前だった。明子は店に残ったようだ。

吉井の立っている方へ、藤森は歩いてきた。吉井は電柱のかげから出て、藤森が近づいてくるのを待った。

「御苦労な話だな、こんな時間まで」

先に口を開いたのは、藤森だった。二、三メートルの距離で立ち止まり、煙草に火をつける。澄んだライターの音が、いまいましかった。

「俺が刑事だということを、あそこのママが喋ったのかね、藤森さん？」

「いや、ブルースの話をしただけだね。君のことは、ひと眼で刑事だとわかった」

「俺のカンも働いたよ。あんたが、事件に首を突っこんできそうだとね」

「事件ね」

「岩本英二の事件は、別の展開になりそうな感じでね」

「ほう」

「明日の朝には、釈放されるんじゃないかと思う」

藤森が吐いた煙が流れてきたので、吉井は掌で払った。

「別に警察の失点とも言えん、と俺は思ってるよ。新米の刑事だって、岩本を犯人と断定できた。殺されたのは岩本の友人で、刺したナイフは岩本のもので、争った形跡もなく、場所は夜明けの『ベッシー』ときてる。事件の二日前に、岩本と被害者は、麻雀屋で言い争いをし、岩本はそこを飛び出している」

「逮捕状を取る要件は満たしてるね」

「はじめは、参考人として事情聴取した。ところが黙秘でね。その時点で、岩本が犯人だと捜査本部の大部分は確信した。令状を取る前のアリバイ捜査が、それでずさんになっちまったんだな」

「君は、どう思ってた？」

「岩本が犯人である可能性は高い、と思ってたよ」

「そうじゃない可能性も、考えはしたんだな」

「刑事だからね」

吉井が笑うと、藤森もにやりと笑い、舗道に捨てた煙草を靴で踏んだ。身なりは申し分ない紳士だが、煙草のマナーはよくない。

「黙秘というのが、いかんのだよ。取調べに、予断を与える」

「別に、責めちゃいない」

藤森が、また笑った。煙草を喫いたくなつた。こんな時に、煙草に火をつけることで、次の会話の糸口を探る。それが、身についたやり方だった。

「私が、首を突っこむとは、どういう意味なのかね？」

藤森の方が、先に切り出してきた。

「岩本が釈放される。捜査は振り出しに戻るわけだが、岩本が無関係ということはないだろう。やつの動きも絡んで、複雑な捜査にならざるを得ない。そう思っていた時に現われたのが、あんただった」

「つまりそれが、刑事のカンか」

「あまりはずれたことはないんだ」

藤森がまた煙草を出したので、一本くれという言葉がのどまで出かかった。それを抑え、吉井はズボンのポケットに手を突っこんだ。

「商売は、藤森さん？」

ネクタイの代りに、洒落たアスコットだった。会社員とは、どこか違うという感じがした。

「まともに商売をして、税金もきちんと納めているよ」

「なんの商売か、と訊いてるんだ、俺は」

「調べるんだね、刑事なら」

ズボンのポケットから手を出した。藤森がぐわえている煙草を、もぎ取ってしまおうかと思つたのだ。思つただけで、それ以上手は動かさなかった。

「姉の方に当たつて、なにか出てくるとも思えないが、なにしろあそこが現場だね」

「私は、ブルースが好きなんだよ。それも洒落たやつではなく、初期のデルタブルースつてやつがね」

「なにを好きだろうと、それは勝手だ。あんたが、なにかひつかき回しそうな気がする。それだけはやめておけ、と警告しておこうと思つてね」

藤森が、声をあげて笑い、煙草を捨てた。自分が馬鹿げたことを言っているのが、吉井にはわかつていた。カンは、カンだけにおくべきものののだ。それでも、藤森に対しては、なにか感じる。自分でも表現できない、微妙な感じだった。

「できれば、もう『ベッシー』には出入りしないことだよ」

「お互いに、いい歳なんだ」

藤森の手がのびてきて、軽く吉井の肩を叩いた。

「公園で出会つた子供が、なんとなく睨み合うみたいなことは、やめようじゃないか。私は、デルタブルースが好きなんだから」

一度笑い、肩に置いた手を軽く振つて、藤森は歩きはじめた。吉井は、藤森の背を見送つた。

二十メートルほどで、藤森は路肩のジャガーに乗りこんだ。プリティッシュグリーンか黒なのか、よくわからなかった。ジャガーのテイルランプが遠ざかるまで、吉井はじつと見ていた。

2

シャワーを使い、髭を当たり、バスローブを着て、朝食の仕度をはじめた。ボイルドエッグとサラダとクロワッサン。それにカフェ・オレと決まっている。

常に新しいものを揃えてあるので、材料を気にすることはない。ドレッシングも自分で調合し、コニャックの瓶に入れたものが冷蔵庫に二種類ある。気のむいた方を使うだけだ。

買物は、メモを残しておけば、すべて通いの家政婦が済ませている。後片付けをすることもない。ベッドメイクから洗濯まで、すべて家政婦任せだった。

ただ、下着だけは自分で洗濯をする。長い間の習慣で、女に下着を洗濯させたのは、これまでの人生の中で二度しかなく、両方とも短期間だった。

就寝前と朝食後に歯を磨く。これも習慣だった。四十八歳にしては、歯はすこぶる丈夫だった。何カ所か治療こそしているが、全部自分の歯だ。

歯と較べて、眼は老いていた。新聞も書類もレストランのメニューも、老眼鏡をかけなければつきりとは見えない。自分の眼がそうなっていることに気づいても、大したショックは受けなかった。

友人の医者が、半年に一度血を採りにやつてくる。それで健康状態のかなりの部分がわかるらしく、いまのところ問題はなにもなかった。

健康であるということが、格別嬉しくもなかった。いままで、大きな病気をしたことはない。健康で当たり前という状態で、ずっと過してきた。

藤森は時計に眼をやり、バスローブを脱ぐとトレーニングウェアを着こんだ。マンシヨンの隣がスポーツクラブで、そこで一時間ほど体を動かし、十一時過ぎに会社に出るのが藤森の習慣だった。

トレーニングは過激なものやらず、毎日メニューも変える。心肺機能と筋力が適度に維持できる、とやはり友人の医者が勧めたことだった。

特に趣味というものはない。

トレーニングウェアで、部屋を出た。この時間に出会ふのは、管理人かガードマンぐらいのものだった。

ボクシングの講習を受ける日だった。ほかに空手などというものもある。ボクシングと言っても、相手はなく、トレーナーの指示に従ってシャドーをやったり、サンドバッグやパンチングボールを打ったりする。最近では、二ラウンドのミット打ちも加わっていた。

ほかにはウェイトトレーニング、水泳、ランニングなどが日替りである。女性の多いエアロビクスは、敬遠していた。

部屋へ戻り、もう一度シャワーを使うと、ワイシャツにネクタイを締めあげ、会社に出る。